空知管内

芦別市

「赤毛のアン」に託したマチ再生

「アンの故郷」と「星の降る里」との出会い

1955年（昭和30年）のピーク時には市内に５山の炭鉱を数え、炭都とも呼ばれた芦別市。だが、その後の国のエネルギー政策の転換に伴って、92年（平成４年）の三井芦別炭鉱の閉山を最後に約95年にのぼる炭鉱の歴史に終止符が打たれた。

炭鉱に変わる“町の顔”として市が着目したのが、全市の９割が深い森、澄んだ大気、降り注ぐような星空ーという炭鉱とは対照的な豊かな自然だった。

84年（昭和59年）に同市は「星の降る里」を宣言、３年後の87年には環境庁が全国の市町村を対象に行った「スターウオッチング・星空の街コンテスト」で「星空のきれいなまち108」の１つに選ばれた。

２年後の89年（平成元年）、「星空のきれいなまち108」の市町村が実施母体となり、第１回「星空の街・あおぞらの街」全国大会が芦別市で開かれるまでになった。

その「星の降る里構想」の中で、露頭炭鉱跡地と周囲の森を生かしたテーマパークとして浮上したのが、90年（同２年）７月にオープンした第三セクター「星の降る里芦別」経営のカナディアンワールド。

石炭に代わるまちづくりの中核―観光の目玉として気候、風土の似ている、「赤毛のアン」の作者ルーシー・M・モンゴメリの故郷（カナダ）と小説「赤毛のアン」に白羽の矢を立てた。

具体的には、芦別市に本場カナダ・プリンス・エドワード・アイランド州シャーロットタウン市の国立公園にある、グリーンゲイブルズ（アンの家）と寸分違わない建物や19世紀のカナダの田園風景と街並みを再現した。文字通りメルヘンチックな“アンの世界”を日本で初めて演出したテーマパークだ。

開園に伴って、シャーロットタウン市の小学校から絵が提供されたり、芦別市民吹奏楽団がシャーロットタウン市で演奏会を開くなどの交流が始まった。こういった３年間の交流実績と芦別市からの要望が実を結び、93年（同５年）７月、両市の間で正式な姉妹都市提携に至った。

テーマパーク造成による新たなまちづくりと、その小説の舞台が現実の姉妹都市提携に具体化したもので、その経緯は道内の国際交流でも極めてユニークなケースといえる。

シャーロットタウン（カナダ）との姉妹都市交流

芦別市は90年、国のふるさと創生基金を元に「まちづくり人材育成事業」と「国際交流促進事業」をスタートさせた。例えば、中学生の海外派遣の場合、自己負担５万円以外の費用を助成するシステムで、同年発足した民間の芦別市国際交

「赤毛のアン」との出会いを作ったカナディアンワールド。今でも市民公園として人気が高い

シャーロットタウン市を訪れすっかり仲良くなった芦別市の中学生たち＝2004年10月

芦別市で豆腐の作り方を体験するシャーロットタウン市からのジュニア使節団の中学生＝2004年６月

流協会の積極的な活動とも相まって、姉妹都市関係は順調な滑り出しをみせた。

主な交流内容は①中学生のカナダ派遣とシャーロットタウン市からのジュニア使節団の受け入れ②国際友好ジャンボかぼちゃ大会の開催③カナダ・デーの記念植樹――など。

中学生のカナダ派遣事業は同国際交流協会が主催して、2001年（同13年）の米同時多発テロ事件時を除く毎年、中学生５人、引率者１人の６人が２週間程度シャーロットタウン市を訪問。ホームステイしながら授業に参加し、本物の「アンの家」を見学する一方、日本文化紹介のプレゼンテーションなどを行っている。

05年（同17年）で派遣された中学生は計55人に上っているが、充実した訪問になるよう英会話、マナーなど８回程度の事前研修を行う周到ぶりで、生徒の国際理解、姉妹都市交流に大きく貢献しているという。

シャーロットタウン市からのジュニア使節団は姉妹都市提携時の来訪以来途絶えていたが04年６月、久々に中学生５人、引率者１人が２度目の来芦を果たした。同じくホームステイで日本の家庭を肌身で感じ、カナディアンワールド公園の見学、豆腐づくり、華道などの日本文化体験や滝里湖オートキャンプ場での宿泊交流会を楽しんだ。

ただ、両市は経済、財政問題なども考慮し、「無理をせず、息長く交流を続けるため、05年から隔年で交互訪問することになった」（芦別市）という。

手づくり交流のジャンボかぼちゃ大会

今では全道的に知られるようになった同国際交流協会主催の国際友好ジャンボかぼちゃ大会は「両市共通の農産物を生かした市民参加の交流を」という市民の提案で、姉妹都市提携時の1993年から毎年10月に行われている、文字通りの“手づくり交流”だ。

一般市民の参加はやや低調気味だが、かぼちゃランタン作り、かぼちゃ重量当てクイズなどの催しの中でハイライトは両市のジャンボかぼちゃ重量コンテスト。双方の実物を並べるわけではないが、正式に計った記録を公表して優劣を決める。

04年10月はシャーロットタウン市のジャンボかぼちゃが430キロだったのに対して、芦別市のそれは410キロと20キロの差でシャーロットタウン市の勝ち。

12年間の星勘定は７勝５敗とシャーロットタウン市が勝ち越しているが、なんともほほえましい国際交流といえる。

まち自慢で姉妹都市交流を実感し合う友好かぼちゃ大会＝2004年10月

記念植樹でつなぐ心の絆

「炭鉱から観光へ」の市民の期待を担い、姉妹都市提携をも生み出した第三セクターのカナディアンワールドだが、バブル経済の崩壊も逆風となって経営が破たん、1999年（同11年）に入場無料の市営公園として再スタートを切った。

しかし、施設は残り、同公園のテナント会が中心となって運営しているが、同公園への入場者数はなお年間６万人以上を数えている。

市民公園化したとはいえ、そのきっかけとなった姉妹都市提携そのものへの具体的な影響はないという。

毎年７月１日のカナダ・デーには姉妹都市提携を記念してカエデとナラを公園内の「アンの家」の前の小道に植樹し、同時に両市がメッセージを交換するのが慣わしだが、05年（同17年）７月にはシャーロットタウン市長のメッセージに加え、カナダ出身の国際交流員アニータ・リエンさんも参加し、姉妹都市を結ぶ“きずな”を再確認し合った。

まちぐるみの活動図る国際交流協会

姉妹都市提携の３年前に設立された芦別市国際交流協会は、まちぐるみの国際交流を推進する中核的な組織だ。

05年（同17年）３月末現在の会員数は正会員（個人）101人、賛助会員（企業など）42団体。個人は１口２千円、企業は１口１万円の会費で、市役所が事務局を受け持っているが、市も１会員として同国際交流協会に加盟しており、運営費は会費や寄付金。その会員数から見ても分かるように、地域を挙げての民間団体といえる。

すでに触れたように、中学生の派遣事業やシャーロットタウン市からのジュニア使節団の受け入れ、ジャンボかぼちゃ大会の開催、姉妹都市提携記念植樹などは同国際交流協会が主催しているほか、毎年、総会終了後には在芦外国人との交流会（04年には外国人60人が出席）を開催。

さらに年２回程度市民を対象にした中国講座やロシアクリスマス料理講座、カナダ・バンクーバー市内の歩き方講座、外国人による国際理解講座などのさまざまな国際理解の催し、イベントを行うなど、活動の幅は広い。

中でも注目されるのが、芦別国際バスケットボール親善大会だろう。同市では姉妹都市提携前年の1992年（同４年）から国際交流員、翌年の93年から英語指導助手を配置しているが、同国際交流協会は地域に根ざした国際交流を一層広げるため、芦別市との共催で全道約240人の国際交流員、外国語指導助手を対象とした芦別国際バスケットボール親善大会を毎年開催している。

バスケットボールで親善を深め合った全道各地の国際交流員たち＝2005年４月

05年（同17年）４月の第10回大会には外国語指導助手ら外国青年23人、市内の中高校生65人、ホストファミリー10家族、一般市民13人が参加したが、日本でのホームステイ経験の少ない国際交流員らに期間中ホストファミリーを紹介するなどの配慮も。

同国際交流協会は会報誌「Out Reach」、広報誌「フレンズ」、カナダ派遣事業報告書「O'CANADA」もそれぞれ年１回発行しており、これらきめ細かな活動が人口減、財政難に悩む同市の国際交流をしっかり下支えしている。

「草の根」の日中友好活動

芦別市の国際交流は「赤毛のアン」に託したカナダとの姉妹都市提携だけではない。1982年（昭和57年）11月、駐札幌中国総領事の同市での講演をきっかけに、民間の芦別日中友好クラブ（現在の会員数は38人、森沢勲・会長）が発足した。

15人前後の会員が自費で２年に１回訪中し、03年（平成15年）には甘粛省蘭州市立敬老院を訪問した際に10万円を寄付したほか、中国各地を訪問して市民レベルの草の根交流を続けている。

これらの地道な友好活動に応えるように同年９月、陳永昌・中日友好協会副会長が外国の元首クラスをもてなす中国釣魚台国賓館で訪問団を招いて歓迎夕食会を開くといった、異例ともいえる“歓待”を示したほどだ。

同クラブは毎年11月の定期総会に駐札幌中国総領事を招いて講演をしてもらっているだけでなく、毎年８月に芦別市主催の中国人殉難者慰霊祭に同総領事を招き、会員と共に献花する活動も行っている。

芦別の炭鉱などで過去に約460人の中国人が殉難したという暗い歴史が、同クラブの活動の根っこともなっており、森沢勲同クラブ会長は「草の根交流はもちろんだが、慰霊祭の意味が忘れられないよう今後も活動を継続していきたい」と語っている。

かつての炭都ならではの地に着いた国際交流といえよう。

芦別市

人口：約２万人　面積：865.1㎢

http : //www.city.ashibetsu.hokkaido.jp/

1893年（明治26年）開拓のクワが入れられて以来、農業、林業、石炭産業を中心に発展してきた。1950年代には炭鉱５山を抱え炭都ともいわれ、人口は一時、７万５千人を数えた。閉山後「星の降る里構想」で再生を図り、1998年（平成10年）から全日本バレーボール女子チームのホームタウン契約、04年（同16年）には全日本女子バスケットボールチームの合宿が行われるなど「合宿の里」としても知名度を上げている。

国際交流の問い合わせ先
芦別市総務部企画課秘書係　TEL(0124)22-2111